



竹石图（裏は村瀬秋水筆《山水图》）

江馬細香（1787-1861）／村瀬秋水（1794-1876）

研究報告

1. 江馬細香筆《竹石図》について

竹石図（図版Ⅰ） 江馬細香（1787-1861） 安政元年（1854）12月 68歳

紙本墨画・衝立 1基 法量38.0×55.5cm

賛 「衰年出門少 病目興書疎 独有毛錐子 依然不棄余」

款記「甲寅晩冬寫併題 細香」

印章「江馬嬢々」（朱文方印）「細香居士」（白文方印）「醉墨」（朱文長方印・関防印）

本稿は、香雪記念資料館が今年度収集した、江馬細香筆《竹石図》（図版Ⅰおよび挿図1。以下、本図と略記）について取り上げるものである。本図は表面・裏面から構成される小型の衝立に仕立てられており、本図を表面とすると、裏面には細香と同じく美濃で活躍した文人画家・村瀬秋水（1794-1876）による《山水図》（挿図2）が描かれている。細香は文学の分野における研究が盛んであるが¹、絵画史では彼女の作品について言及したものはまだそれほど多くない²。そのような中、当館では《蘭図》、《四君子巻》等の細香作品が早くから所蔵され、すでに詳細な解説も執筆されているが³、今回は新たに収集された本図について紹介するものとした。

江馬細香について

江馬細香は、江戸で杉田玄白（1733-1817）、前野良沢（1723-1803）らに医学を学んだ大垣藩医・江馬蘭斎（1747-1838）の長女として、天明7年（1787）4月4日、美濃国安八郡藤江村（現在の岐阜県大垣市）に生まれた。名は多保、裊（たお）、嫺。細香は字で、号は湘夢。名の「裊」は、たおやかで細い枝などがしなやかに揺れるという意味である。中国の古典文学では、「裊」を竹の揺れる美しい姿を描写する言葉として頻繁に使用するという⁴。字の「細香」は杜甫の詩「嚴鄭公宅同詠竹」を踏まえ、雨で洗われた竹が風に吹かれ、その香りが漂うという意味で、竹の香りを表現する言葉である⁵。

細香は寛政11年（1799）13歳頃より、墨竹画に優れ、京都・永観堂禅林寺の住職ともなった玉潁（1751-1814）に絵を学んでいる。文化10年（1813）27歳の時、遊歴中に蘭斎のもとを訪れた漢詩人、儒者の頼山陽（1781-1832）に入門し、山陽が没するまでの約20年間、たびたび京都に赴くなど、山陽やその周辺の知識人たちと交流した。また、山陽の勧めにより、文人画家として名高い浦上春琴（1779-1846）にも師事した。

文政3年（1820）34歳で、梁川星巖（1789-1858）・紅蘭（1804-79）夫妻、村瀬秋水の兄で山陽の高弟でもあった村瀬藤城（1791-1853）ら美濃の文人たちと白鷗社という詩社を結成した。その後、弘化3年（1846）60歳で、大垣藩士・小原鉄心（1817-72）らとともに大垣の若手漢詩人による詩社である黎祁吟社（れいきぎんしゃ）を、嘉永元年（1848）62歳の時には鉄心をはじめ黎祁吟社のうち、特に親しい者たちと咬葉社を結成し、社長に推挙され指導的な役割を担うなど、文久元年（1861）9月4日に75歳で没するまで詩画の制作活動に励んだ。墓所は父・蘭斎と同じ、岐阜県大垣市藤江村に所在する禅桂寺。没後10年目の明治4年（1871）、細香の漢詩集『湘夢遺稿』が親族により出版されている。存命中の天保3年（1832）に刊行された、絵師・白井華陽（?-1836）が当時の著名な画家を紹介した画伝『画乗要略』巻5の「女細香」の項には、「詩書画、兼美なり。喜んで竹図を写す」と記されているとおり⁶、細香は墨竹をはじめ、花卉や山水など多くの絵画作品を残した。

本図の基本情報

本図が衝立に仕立てられていることは既述のとおりであるが、枠は木製であるものの、竹幹に見立てられ、節が付けられている。左右の脚も、竹幹の断面を模した形になっており、墨竹画で有名な細香を意識したか

のような造りとなっている。縁と本紙の間には、細かな金箔が散りばめられ装飾されている。箱や極書などは現存していない⁷。

本図は款記の一部「甲寅晩冬」（挿図3）から、安政元年（1854）12月、細香68歳時に描かれた晩年に近い作品である。横長の紙幅であり、画面右下から向かって左側に傾斜する土坡が淡墨と筆の擦れにより表される。土坡の手前には細かな草や点苔、草の影とともに、付立によりやや小さな石が描かれる。その奥には土坡の傾斜に沿いながら淡墨によるやや大きな石が、またその左脇にも2つの石が置かれている。石には淡墨と渴筆により、影や湿り気のある質感が生まれており、濃墨による点苔がアクセントになっている。

石の奥に目を移すと、蘭の草花が姿をのぞかせている。蘭と石を交互に重ねて画面に奥行きを出す手法は、画業の前期に当たる文政11年（1828）5月、細香42歳時に制作された《蘭図》（当館蔵）に見られることがすでに指摘されており⁸、本図ではさらに手前に土坡や小さな石、草を描き足すことによって、いっそう奥行きを出すことに成功しているといえる。

蘭の花は、石の淡墨と比べ、より淡い色で描き分けられ、雄蕊はやや濃い墨色で表現される。太細が付けられ、放射状に伸び上がり垂下する葉は、中国・明末に成立し、日本における文人画に大きな影響を与えた『八種画譜』の蘭図にも似通う表現である。また、《蘭図》では、画面右下の蘭の葉が左上の款記へと対角線上に伸びていくような動きが感じられると見なされているが⁹、本図も同様の描き方がなされている。土坡の傾斜の最も低い辺りには、笹の葉が濃墨で勢よく描かれている。

画面右上からせり出した岩山にも、水を多く含ませた筆で、淡墨による影や笹の葉、また墨の濃淡による点苔が描かれる。背景にはごく淡い墨を所々に刷き、霞を表現している。墨一色にもかかわらず、濃淡や筆の擦れを巧みに用いて全体を描き、一つの画面を構成している。細香作品の中でも、全体的に早々に描き上げられた感じが感じられ、即興的に制作された可能性も考えられる。

画面左上には、細香による自作の賛（五言絶句）が書き付けられており、「衰年出門少 病目興書疎 独有毛錐子 依然不棄余」とある（挿図3）。賛や、後述する款記に見られる書体は、絵筆の勢いと呼応するかのように速筆である。この賛は、細香の漢詩集『湘夢遺稿』等にも掲載されていない。読み下してみると、「衰年 門を出ること少なく 目を病み書に興ずること疎し 独り毛錐子のみ有り 依然として余を棄てず」となる。「毛錐」あるいは「毛錐子」とは、錐（きり）に似ることから筆の異称である。試訳すると、「体力の衰える年齢となり、家から出ることも少なくなった。目を病み、書物を楽しむことにも関心が薄れている。ただ筆だけがそばにある。筆は、依然として年老いた私を捨てることはない」となるだろうか。

細香は、天保14年（1843）57歳の夏に目を患って以降、弘化2年（1845）頃になっても完治には至らなかったという。また、嘉永4年（1851）65歳の夏、残暑が厳しく両耳の耳鳴りに苦しむなどしていた¹⁰。しかし、当時の細香は、咬菜社では社長として後進の育成に当たるなど、充実した活動を行っていたことが推察される。この賛からは、老齢を迎え、体の衰えをさまざまに感じるようになりつつも、いつもそばにある筆とともに、これからも詩書画を生み出していきたいという、細香の意欲や決意も感じ取れるのではないだろうか。

款記、印章と類例作品との比較

本図の款記における「細香」の「細」の字は、1画目を長めにとり、折れの部分を省略し、以下を繋げている。隣の「田」は、右上の折れを角張らず、丸めたような形をとっている。「香」は楷書体で書かれる場合もあるが、本図の「香」は、「細」の最終画から文字同士を続けて表す草書体である。前出の、当館所蔵で文政11年（1828）5月、42歳時制作の《蘭図》は、本図が描かれる26年前の作品であり、全体的に細身の書体ではあるが、「細」の1画目の入り方や糸偏の鋭角的な折れ、「田」の丸い角、「細」の最終画から「香」の1画目へと続ける形などが類似している¹¹。

細香の画業全体における款記の変遷は今後の課題であるが、本図の「細香」の字形や文字同士の繋がりを他の作例と見比べると、制作年不明の《題墨竹図》（大垣市教育委員会蔵）¹²や74歳時の《与春琢詩》（江馬家蔵、岐阜県歴史資料館寄託）¹³、50歳時の詩（個人蔵）¹⁴などに似通っている。

印章は、「江馬嬢々」朱文方印（約2.3×2.2cm）ならびに「細香居士」白文方印（約1.9×1.9cm）であり、関防印「醉墨」朱文長方印（約3.0×1.3cm）が捺されている。印の大きさはすべて、当館が平成23年（2011）に岐阜県歴史資料館にて調査をさせていただいた、細香の印章を実際に捺した江馬寿美子文書《印譜》に見られるものと形状、大きさともに一致する¹⁵。

竹石図、あるいは梅・菊・蘭・竹を描く四君子を含め、一つの画面上に蘭や竹を描く例は他の細香作品の中にも見られ、本図のような主題は、細香の得意としたものといえる。細香が蘭や竹を描くものとして、年代順に以下の作例を挙げる¹⁶。

- A. 天保3年（1832）秋、46歳時《蘭竹図》個人蔵、紙本墨画、法量不明、款記「壬申秋日寫併録似 琴風女史政 細香」、印章「嬢々」カ（朱文円印）、「細香女史」カ（白文長方印）、関防印（印文不明）¹⁷（挿図4）
- B. 安政3年（1856）12月、70歳時《溪流竹図》個人蔵、絹本墨画、43.6×85.0cm
款記「丙辰晩冬寫併録 細香時年七十」、印章「江女嬢々」（白文方印）、「細香居士」（朱文方印）、「一鶴一琴」（白文方印・関防印）¹⁸（挿図5）
- C. 安政4年（1857）夏、71歳時《水墨竹蘭の図》双幅のうち左幅、個人蔵、材質不明、各138.0×43.5cm、大垣市指定有形文化財
款記「丁巳夏日七十一歳細香併題」、印章2顆および関防印（印文不明）¹⁹（挿図6）
- D. 安政5年（1858）9月、72歳時《四君子卷》のうち「画 蘭竹」当館蔵、紙本墨画、29.2×41.3cm、印章「江馬嬢々」（白文方印）、「湘夢」（白文方印）²⁰（挿図7）
- E. 制作年不詳《蘭竹図》個人蔵、絹本墨画、107.2×28.4cm、款記「細香寫併製」、印章「江馬嬢々」（朱文方印）、「細香居士」（白文方印）、「一鶴一琴」（白文方印・関防印）²¹（挿図8）

A. は本図の22年前に制作され、細香から同じく女性画家である上田琴風（1788-1843）へ贈られた作品である。画面右側からせり出す岩山、左下方向へと傾斜する土坡を描く構図は本図と共通する。縦長の軸装の画面にモチーフがうまくまとめられているが、本図と比較すると、石や点苔周辺に見られる陰影があまり付けられていないこともあり、土坡の手前から奥へと続く空間がやや曖昧である。また、霞がかった風景に仕上げるためか、岩に自生する蘭の葉の一部、その左脇のわずかな点苔、上部の岩山に見られる笹の葉などに濃淡が付けられるが、色調の幅が狭く、また筆の運びが比較的慎重であり、全体的に静かで落ち着いた印象を受ける。

B. は本図の2年後に描かれたものであり、本図と同じく横長の画面である。画面右側に描かれる溪間の岩に表される笹の葉、また上部から下に向かって茂る笹の葉には筆の勢いが感じられ、葉の一部や点苔の濃墨も画面を引き締めている。グラデーションによる影の付け方も効果的であり、奥から手前に向かって流れる溪流も巧みに表現している。

C. は本図の3年後の制作であり、A. と同様、縦長の軸装の画面である。本図やB. のように笹の葉の表現に筆の勢いが増し、蘭の葉の伸びも速筆によって生き生きと表されている。縦長の画面ながらも、岩陰や葉に見られる墨の濃淡などにより奥行きが感じられ、画面下部には手前に向かって溪流が描かれているのも面白い。

D. は本図の4年後の制作で、細香の自賛詩により、大垣周辺の人物で書や詩文に優れた戸倉竹圃（1832-81）の依頼により描かれたものであることがわかる。細香による11図の四君子画、細香の1点の賛詩、岡本黄石（1811-98）ら7人による8点の詩書から成っている卷子である。この《四君子卷》のうち「画 蘭竹」は、石は描かれていないが、土坡と蘭は本図を反転させたかのような構図である。画面は、本図に比して余白が多く、より穏やかですっきりとした印象を受ける。しかし、余白を用いながら淡墨を重ねて陰影を表現し、また点苔によっても奥行きを作り出している点、土坡の傾斜に沿うように濃墨で下向きの笹の葉を表現する

点は本図と類似している。

E. もまたA. C. と同様、縦長の軸装の画面であるが、制作年は不明である。しかし、画面中央やや下に見られる下向きの笹の葉の形や墨の色調、岩に強く打たれた点苔や蘭の葉の伸び、さらには背景に刷かれた淡い墨による霧の表現や、款記とともに捺される印章が共通することなども、本図と近い時期に描かれていることを示唆するようにも思われる²²。

今回、蘭や竹を描く作例として、執筆者が確認し得た制作年が明らかな作品では、A. からB. の間に24年もの開きがある。B. の2年前に描かれた本図は、彼女の作品において、特に蘭の葉や笹の葉の濃淡、石の影や点苔などに大胆で勢いのある筆致や表現が目立つ。A. と比較すると、運筆にスピード感や勢いが増し、モチーフがやや大局的に表されるようにも見受けられる。濃淡や陰影の調子が絶妙に表現されるなど、明らかに画技がより習熟したことが見て取れる。細香の60歳代は画業大成期とも言われており、本図はそのとおりに熟練した画技を存分に窺い知ることができる。体調面に不安を抱えつつも、細香の手慣れた表現を見せるB. からE. の特徴をも併せ持つ作品であるといえよう。

なお、冒頭に述べたように、本図の裏面には村瀬秋水による《山水図》が描かれている。「時在乙卯暮春」という款記の一部により、安政2年（1855）3月、秋水が61歳時に制作したことが判明する。材質は紙本墨画、法量は37.6×55.0cm。遠景の大きな山々を背景として、中央手前やや左に茅屋と木々を描いている。茅屋内には一人の高士が座しており、外には二人の人物が高士を訪ねる様子が描かれている。本紙上部中央から、七言絶句の賛「白板扉開引午雲 緑陰樹合帯南薰 有此山人安眠境 難説于君痛与君」が1行に2文字ずつ付されている（挿図9）。款記は「時在乙卯暮春為 望湖堂主人嘱 秋水」、印章は「源徽」白文方印、「世猷」白文方印（挿図10）、「秋□」朱文長方印・関防印（挿図11）、「好古」朱文長方印・遊印である（挿図12）。前述のとおり、細香は村瀬秋水の兄・藤城らと白鷗社を結成するなど、親しく交流していた。表面、裏面とも法量がほぼ同じであることから、本衝立は美濃周辺の旧蔵者が細香、秋水に制作を依頼して仕立てたものだろうか。いずれも美濃を代表する画家による水墨画であり、細香の《竹石図》が安政元年（1854）12月、秋水の《山水図》が同2年（1855）3月と制作年が近いことも興味を引き立てられる。

（実践女子大学香雪記念資料館 学芸員 中村玲）

謝辞

図版掲載に当たりましては、個人の方々にご許可を賜りました。ここに記して深謝申し上げます。

註

- ① 門玲子『江馬細香－化政期の女流詩人』藤原書店、2010年。
② 黒川桃子「江馬細香自画賛『墨竹図』考－その光の表現をめぐって－」和漢比較文学会編、発行『和漢比較文学』第47号、2011年8月、54-76頁等。
- ③ 主な先行研究として、以下の文献や論考、展覧会図録が挙げられる。
① 大垣市・大垣市教育委員会編、発行『大垣の先賢展 蘭斎と細香』1979年。
② 岐阜市歴史博物館編、発行『美濃の南画』1988年。
③ 河野元昭監修『定本・岐阜県の日本画〈南画編〉』郷土出版社、1990年。
④ 安村敏信編『江戸の閨秀画家』板橋区立美術館、1991年。
⑤ バトリシア・フィスター『近世の女性画家たち－美術とジェンダー－』思文閣出版、1994年。
⑥ 大垣市・大垣市教育委員会編、発行『大垣の先賢展 江戸の閨秀詩・画人 江馬細香展』1996年。
⑦ 岐阜市歴史博物館編、発行『館蔵品図録 絵画Ⅰ「南嶺派・南画派」』2001年。
⑧ 頼山陽史跡資料館『山陽周辺の女流画家たち』財団法人 頼山陽記念文化財団、2007年。
⑨ 鄭麗芸『文人逸脱の書 池大雅・江馬細香・三輪田米山』あるむ、2008年。
⑩ 仲町啓子「描いた女性たち－平安時代から江戸時代を中心に－」『國華』1397号、國華社、2012年3月。
⑪ 大垣市・大垣市教育委員会編、発行『江馬細香～書画に秀でた女流漢詩人』2014年等。
- ③ ① 太田佳鈴「江馬細香の初期と前期における画風展開－「蘭図」を中心に、落款と印章の検証を含めて－」『実践女子学園香雪記念資料館 館報』第9号、実践女子学園香雪記念資料館、2012年3月、27-36頁。
② 同「江馬細香筆蘭図」『國華』1397号、國華社、2012年3月、48-51頁。
③ 同「江馬細香筆『四君子巻』について」『実践女子学園香雪記念資料館 館報』第13号、実践女子学園香雪記念資料館、2016年3月、35-42頁。
- ④ 前掲註2 ⑪ 1頁。

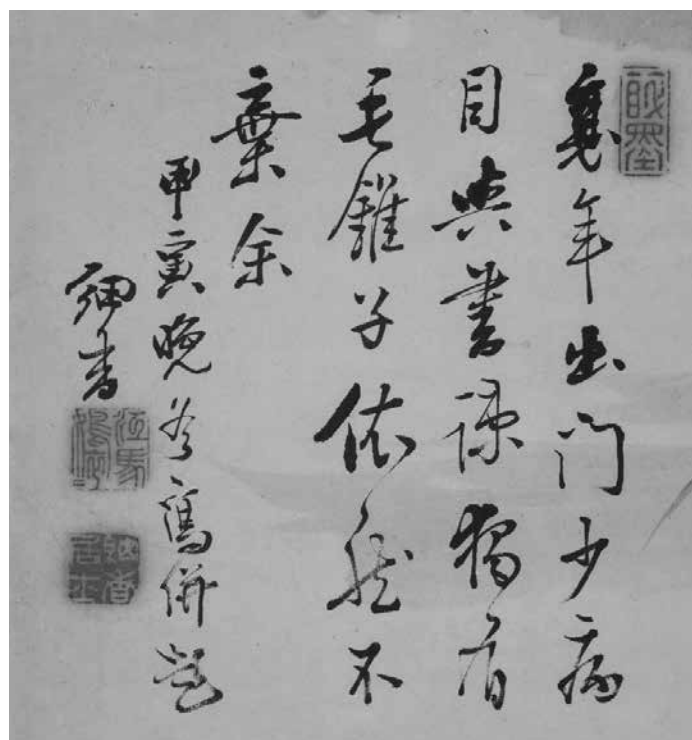
- 5 同前。
- 6 小林忠、河野元昭監修、木村重圭編集・校訂『[定本]日本絵画論大成』第10巻、ベリかん社、1998年、85頁。
- 7 なお、本衝立は収集当初、両面において特に本紙周囲に損傷が目立ったため、平成30年(2018)4月から6月にかけて修理を行った。
- 8 前掲註3① 30頁。
- 9 同前。
- 10 前掲註1① 442-444頁。
- 11 前掲註3① 31頁、38頁挿図8、挿図9。
- 12 鄭麗芸「江馬細香漢詩釈文及び訳注―題墨竹図八首」梶山女学園大学文化情報学部編、発行『梶山女学園大学文化情報学部紀要』第3巻、2004年3月、133頁。
- 13 前掲註2⑥ 27頁。
- 14 Patricia Fister『Japanese Women Artists 1600-1900』Spencer Museum of Art University of Kansas, Lawrence 1988年、110頁。
- 15 伊藤信『細香と紅蘭』(大垣市赤坂町 矢橋龍吉氏発行、1969年)巻末の「細香印譜」、前掲註2⑪ 22、23頁にも内容が掲載されている。
- 16 A. からE. の作品のほか、前田詠子「近世の女筆 江馬細香 頼山陽の愛弟子」(『日本美術工芸』647号、日本美術工芸社、1992年8月、71頁)に掲載される万延元年(1860)74歳時の《墨竹図》、前掲註2① 24頁に掲載される制作年不詳《竹と蘭》(個人蔵か、紙本、124×28cm)や、前掲註2⑥ 40頁に掲載される制作年不詳《竹と蘭》(個人蔵か、軸装、墨画、127×29cm)等がある。
- 17 前掲註2⑧ 9頁。
- 18 前掲註2④ 45頁。
- 19 大垣市教育委員会編、発行『大垣の文化財』2002年、49頁。
- 20 前掲註3② 口絵および42頁。
- 21 町田市立国際版画美術館編、発行『縁起もの ― 版画と絵画で楽しむ吉祥図像 ―』2013年、28頁。
- 22 前掲註21 148頁には、「本図は闊達な筆致や霏の存在を描き出す淡墨の効果的な使用から画業大成期の作とみられる」とある。



插图1 江馬細香筆《竹石図》



插图2 村瀬秋水筆《山水図》



挿図3
江馬細香筆《竹石図》賛・款記・印章



挿図4
《蘭竹図》



挿図6 《水墨竹蘭の図》
双幅のうち左幅



挿図8
《蘭竹図》



插图5 《溪流竹图》



插图7 《四君子卷》のうち「画 蘭竹」

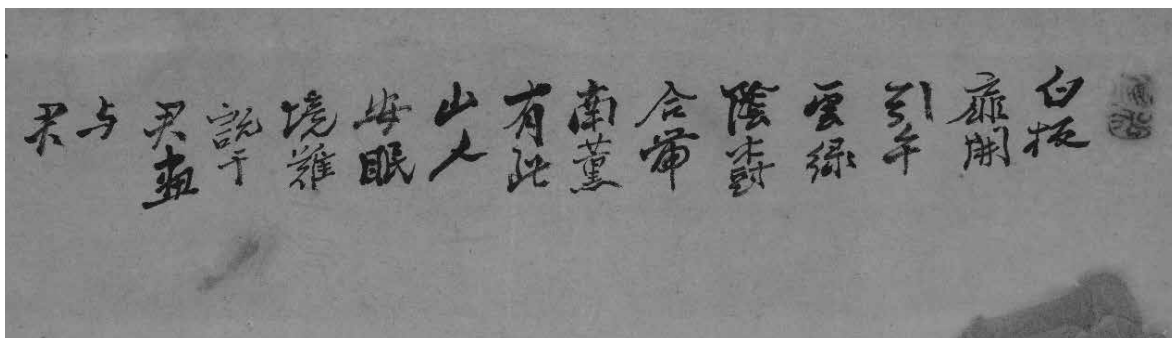


插图9 《山水图》赞

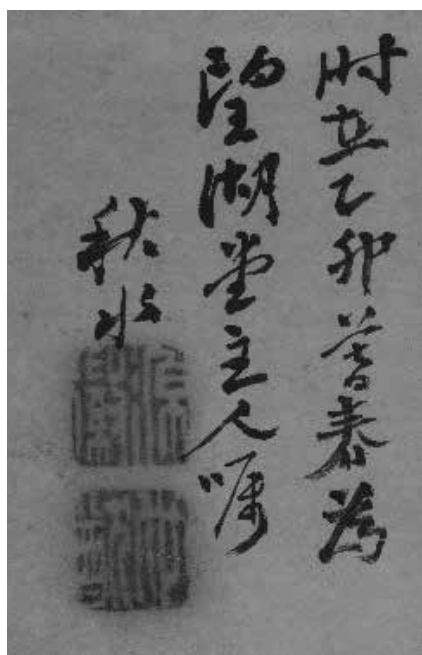


插图10
《山水图》款记·印章



插图11
《山水图》関防印



插图12
《山水图》遊印